

平成 24 年 11 月 7 日

海外実習演習報告書

国際開発工学専攻 修士課程 2 年

川原 優輝(2. を執筆担当)

竹久 祐貴(3. を執筆担当)

加藤 智明(上記以外の部分の執筆と全体調整を担当)

国際開発サークル IDAcademy のベトナムにおける活動として、この度、滝久雄基金より助成を頂き、フィールドトリップを行いました。以下にその結果を報告致します。

1. フィールドトリップの概要

【期間】 2012年9月1日から2012年9月29日まで

【場所】 ベトナム(滞在順に、ナムディン省ダオケイトン村、フエ省、ハノイ市)

【目的】 1. ノンラーの生産工程の詳細の把握

2. 著名なノンラーの生産地であるフエ省やチュオン村から収益向上のための取り組みのヒントを得る

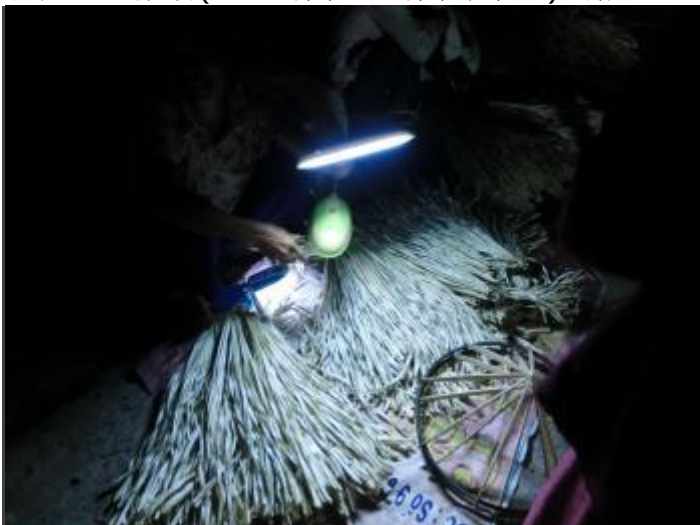
3. 現地パートナーとの関係構築

2. ナムディン省ダオケイトン村における活動のまとめ

当初、ノンラーの縫い作業を機械化することを一つのアイデアとして持っていましたが、現地では生産工程の縫い作業以外の部分を効率化の対象にすることも視野に入れ、全生産工程をより詳細に観察しました。結果、生産工程初期の、ヤシの葉を開いて伸ばす作業も多くの時間が割かれていることが分かりました。また、生産者や流通業者へのインタビューから、ノンラー生産家庭の多くは農家で生活に余裕のない家庭であること、子どももノンラー作りを長時間手伝っていること、過去に刺繍などを施していた時期があったこと、流通網はベトナム国内のみならず中国にまで及んでいることなどが分かりました。

以下は成果のひとつである全生産工程を資料化したもので、活動内容ブログからの抜粋です。

市場で必要材料(ヤシの葉、筍の葉、竹、糸)を購入してくる。



↓

ヤシの葉を手で開き、炊飯器を改造した器具を用いて、伸ばしていく。



↓
ナイフで竹を割り、5mm程度の太さの竹ひごにする(この状態のものを市場で購入することも可能)



↓

竹ひごを木枠に当てて長さを測り、不要な部分を切り落とした後、ナイフで角を落とし、両端を細らせて糸でくくり、木枠にはめる。





↓
ヤシの葉を木枠に当てて長さを測り、適当な大きさに切る。

↓
切り取ったヤシの葉を糸でくくり付け、木枠の頂点を軸に放射状に並べた後、隙間をより小さく切ったヤシの葉で埋めていく。



↓
2層目として、筍の葉を切り、同じ要領で隙間なく並べる。



↓

3層目として、ヤシの葉を1層目と同様の手順で並べた後、糸とリング状の木で仮止めをする。

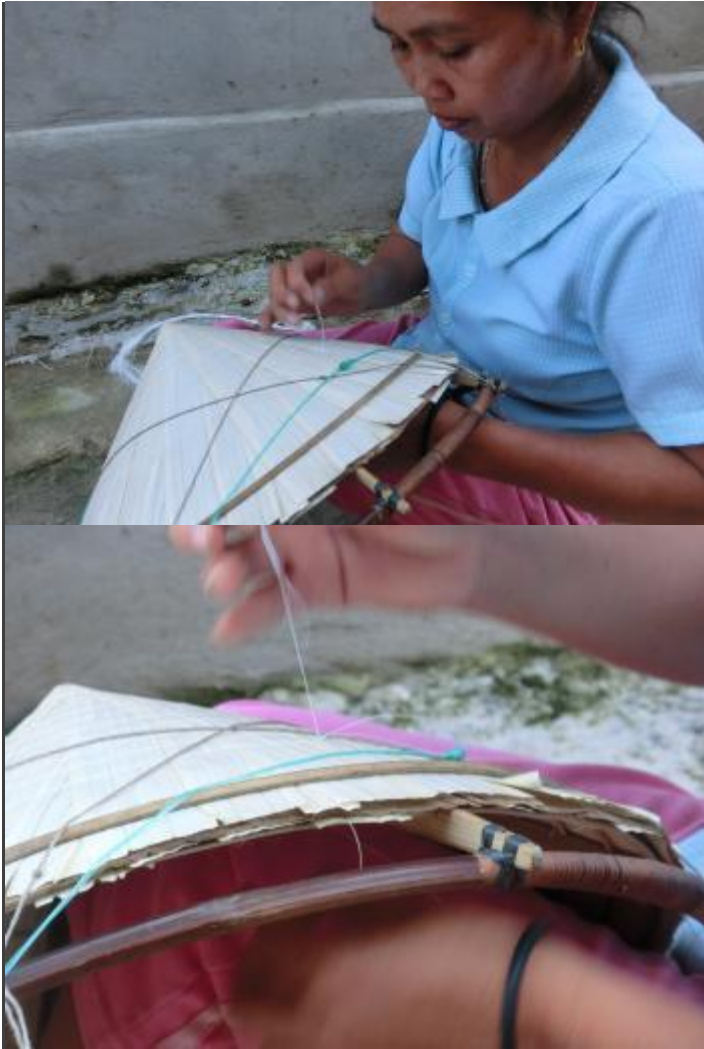




↓

頂点に近い方の環から縫い付けていく。生産者に依るが、10 段目くらいを縫うあたりで仮止めを外す。





↓
一番下の環(淵)まで縫った後、余った葉を切り落とす。



↓
淵に竹ひごを足し、縫い付ける。

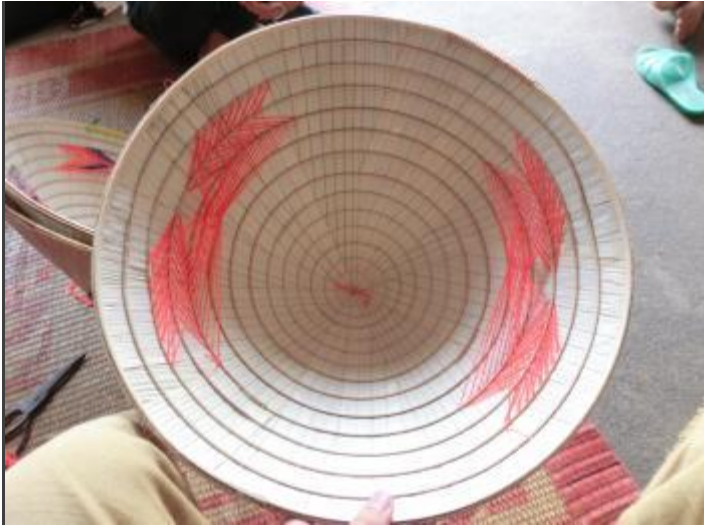


↓
頂点を円状に環縫いする。



↓

顎ひも用の糸を縫い付ける。



3. フェ省における活動のまとめ

フェ省は刺繍等の装飾が施されたノンラーの生産で著名であるので、ダオケイトン村での観光用ノンラーの生産の可能性を覗み、ノンラー生産や生産家庭、流通状況を調査しました。調査の結果、フェのノンラーは販売価格が高いわけではないこと、生産者の利益分もダオケイトン村の生産者と大差がないこと、生産者家庭の数は特にフェ市内の産地で減少しつつあることなどが分かりました。興味深いことに、フェの自治体はノンラー作りの伝統を守っていくことを目的として、ノンラーのフェのブランディングや新デザインの考案といった取り組みを行っていることも分かりました。



フェ伝統のノンバイトーの生産

フェ省での活動の成果である、いくつかの村の観察結果を、再びブログからの抜粋で紹介しします。

① ミーラム村

ノンフェを守る組織が活動を行っている地域ということで紹介を受けました。村には約 **280** 世帯があり、その多くの家庭でノンラーを作っているそうですが、その中で組織に加盟しているのは **35** 世帯とのことです。まずは、組織に加盟していないある女性にお話を聞きました。この女性は **63** 歳で、工場勤務をする娘 **2** 人と **3** 人で暮らしています。この女性は基本的に朝から晩までノンラーを作っていますが、視力をはじめ体が衰え始めているので作業が遅く、生産量は **1** 日に **1** から **2** 個だそうです。売値は **23,000** ドンから **25,000** ドンで、一つあたりの原価コストが約 **7,000** ドンとのことなので、ノンラーを **1** 個作ることによる儲けは **1** ドル弱程度になります。この女性の作るノンラーは、ナムディンのものと違いフレームの数が **16**

本で、葉はやや緑がかっていて、3層全て同じ葉で作られています。次に、組織に加入している女性の家に行き、お話を伺いました。この女性は、約1年前に組織に加入し、昨年3か月間、講習会を受けたそうです。講習会は先述の組織主導で、村の名人を講師にし、ノンバイターの作り方と葉の色をきれいにする方法を学ぶそうです。その講習会での技術向上により、ノンラーの買い取り価格が約30%上がったそうです。

②タイホー村

この村はアテンドをしてくれた **Huong** さんが事前に調べた時に名前が出てきていて、フェで聞き取りをしているときにも何回か著名なノンラー生産地として名前が上がりました。訪れて初めて知りましたが、この村では主にノンラケーを作っています。ノンラケーはノンラーの一種で、基本的に1層から成り、使用する葉も違います。聞き取りによると、過去にはノンバイターなども作っていたそうです。ノンラケーの売値は約20,000ドンで原価は約7,000ドンだそうです。

③ユンダイ村

この村では家族単位ではなくノンラーを抱える工房のようなものが存在するらしい、という情報を得ていました。村に着き、ノンラーを作っていたある家庭にお邪魔しました。

この家庭では、ノンバイターとノンラーサンを作っており、売値はそれぞれ30,000ドン(原価6,000ドン)、40,000ドン(原価5,000ドン)との事でした。どちらも1日の最大生産量は3つ(作業時間は約9時間)で、生産は、バイヤーから伝えられる需要に合わせて行っているようです。

工房について聞いたところ、農業が忙しくない5月から8月にかけて季節限定でやっているそうです。6から8人のグループをいくつか作り、それぞれが得意な作業を分担して担当し、生産効率を上げるそうです。また、その季節は日差しが強いのと観光客が多いことが理由で値段がそれぞれ10,000ドン程上乗せされるそうです。

4. ハノイにおける活動のまとめ

主に、ノンラーの生産地として有名なチュオン村の訪問、ハノイの土産物市場におけるノンラーの位置づけの確認、そして今後、プロジェクトの方向性を確定し、活動を本格化していくうえで、欠かせなくなってくる現地でのパートナーとの関係づくりを行いました。

まず、チュオン村の訪問では、ノンラーの生産状況や流通について確認した後、ノンラーのマーケットの側面について理解を深めるために、ノンラーの輸出を多く手掛ける女性に話を聞きに行きました。ベトナム国内市場においては、ヘルメット着用の義務化などを背景にノンラーの需要が下降傾向にあることが分かりました。土産物市場の調査では、ノンラーを専門的に扱っている店はなく、その他各種の土産物と一緒に扱っている土産物屋を数軒見つけました。置かれているものは、チュオン産やフエ産のもので、チュオン産のものは実用目的、フエ産のものは観光目的であるのに対し、販売価格は前者の方が総じて高いことが分かりました。全体の印象としては、現状、土産物としてのノンラーはあまり人気が高くないと感じました。考えられる理由としては、持ち帰るのにかさばる、デザイン性が高くない、というのがあります。最後に、現地パートナーとの関係づくりですが、友人の紹介などを頼りにハノイの大学生と会って、プロジェクトの主旨、活動方針などを説明し、協力を求めました。結果、ナムディン省出身で現在ハノイにある大学に通う大学生を中心に、6名から協力に対して積極的な返答をもらいました。今後、協力体制などの詳細を詰めていく予定です。

5. 今後の活動の展開について

帰国後、今後の活動の展開についてメンバー間で議論を行いました。フィールド調査の前から大きな方向性として、二つの展開を考えていました。一つは、生産の時間効率性が低いことに着目し、原則、最終製品のノンラーの形は変えずに、生産効率を上げる手法の開発・普及を行っていくこと。もう一つは、一村一品運動のような形で、今よりも付加価値の高い製品を考案し、その生産・流通体制を作り上げていくことでした。いずれの方向性も、種々の困難・障壁がありますが、将来的にも発展の可能性がより大きく見込めるということを重視し、後者のアプローチでプロジェクトを進めていくこととしました。

次回のフィールドトリップは、来年3月を予定しています。次回のフィールドトリップで現地の人々の反応や意欲を確認するとともに、その他可能な限りの実現可能性調査を行い、その結果を受けて、新たな生産品を決定したいと思います。当面はそこをマイルストーンとしてスケジュールを組んで活動していきます。